01 幕末の海防とお雇い外国人

嘉永６年（1853年），北風を冒して２隻の蒸気艦がそれぞれ１隻の帆走艦を曳いて浦賀港口に停泊した。日本に開国を求めるペリー艦隊の来航である。

江戸湾の海防体制は，浦賀水道周辺に砲台を築き，浦賀両岸の洋式大砲だけでも艦隊を撃破する能力があった。しかし，行動自在の蒸気艦は，避弾行動が可能であり，搭載する炸裂榴弾砲は浦賀市街を焼き払うことができる。

７年前に，浦賀水道から江戸へ入ろうとしたビドル代将のアメリカ帆走艦隊２隻は，浦賀奉行所の手で野比沖に停留。通商不許可の老中告諭書を渡され，退去している。ひと月遅れて長崎へ入港したセシル少将のフランス艦隊３隻は，「宣教師の長崎常駐」を意図していた。上陸を拒否されたフォルカード神父は「長崎市街の砲撃殲滅」を主張するが，要塞砲の報復による艦隊の被害を重視する司令官は，退却の決断を下した。

自衛以外の武力行使を禁止されてはいたものの，もしビドル代将の80門戦列艦が火蓋を切れば，浦賀の沿岸砲や兵船の搭載砲では太刀打ちできない。といって航洋性のある大型砲艦を建造する予算は欠乏している。そのため江戸湾内に吃水の深い船は進入不能と想定して，「長崎並みの湾口要塞化」が幕府の対策となった。

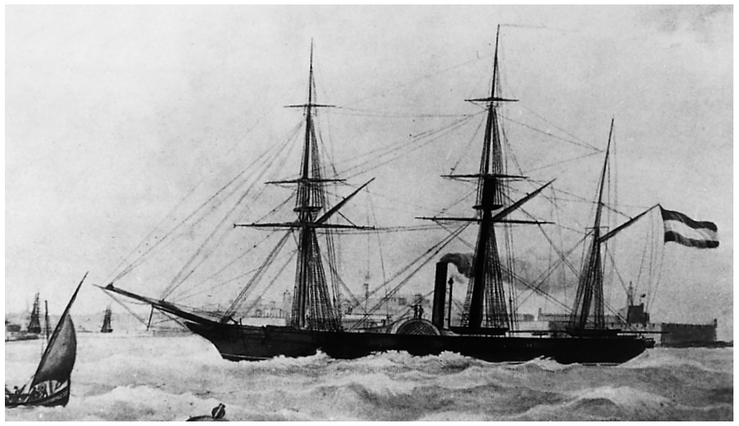
今回のアメリカ艦隊は，測量ボートを先頭に進め，日本側が武力で測量を阻止するならば，後に控えたペリー代将の乗った蒸気艦が自衛の応砲を放つ構えなので，大艦の品川沖侵入を許すことになった。

幕府の「蒸気船購入希望」は，貿易相手のオランダ商館へ伝わるが，この時，露土紛争（クリミア戦争）に英仏両国が介入して大戦争へ発展する状況にあり，軍艦の譲渡はむずかしい状況にあった。そこでクロチウス商館長は，とりあえずコルベット１隻を呼び，これをモデルに建造受注を図ることにした。

嘉永７年，長崎へ派遣されたスンビンSoembingは，東アジア植民地警備団用の新造艦で，60ポンド炸裂榴弾砲をはじめ，ペリー艦隊と同種の砲をひととおり揃えている。しかし，推進機が旧式の外輪式だった。「これから建造する艦は“スクリュー式”」と主張する艦長ファビウス中佐の意見を容れて，スクリュー・コルベット（搭載砲は平和克服後装備）２隻の発注が決まった。

ファビウス艦長は牧師の子で，商船学校中退後に水夫生活を積み「年齢超過特別生徒」として海軍士官学校を１年で卒業した苦労人。その彼の下で，近代軍艦に関するさまざまな教育が行なわれることになった。佐賀藩水夫13人の乗組実習に始まり，砲術教育には幕府と佐賀・薩摩諸藩の鉄砲方が参加，ファビウス“団長”（コマンダント）は出島の官舎で連日約20人に砲術・蒸気機関の講義を続けた。教官の報酬を尋ねられても，階級別の年俸額（第１表参照。単位はフルデン（英語読みでギルダー），6.5フルデンが当時の１両に相当）だけを答えて，２カ月後に帰国する。

翌年（安政２年/1855年），ヘデーGgedehの艦長となったファビウス中佐は，スンビンを伴って長崎へ再来，両艦で教育を再開する。出島での講義はファビウス団長が続け，艦上の実習はスンビン艦長ペルス・ライケン大尉が病気のため，ヘデー副長コーレンブランデル大尉が指導している。



オランダ軍艦スンビン Soembing（後の観光）。

伝習開始から３カ月，スンビンはオランダ国王から日本皇帝（将軍）へ贈呈され観光丸と命名された。ヘデー帰国の前に，健康を回復したペルス・ライケン新団長は両艦の希望者から適格者24人を教官に選抜し，ファビウス団長が賛成した。ただし機関士の人選は難航し，ヘデーの一等機関士が死亡したためスンビンの一等機関士を充てなければならず，二等機関士は２人とも「当地との友好促進が期待できない人物」なので，両艦の三等機関士のみが採用された。なお，幹部教官の手当額は第２表のとおりである。

薩摩の献上船昇平丸で海路赴任する矢田堀，勝以下の伝習生が長崎に到着して「入門」したのは，開講半年が過ぎてからのことだった。

無報酬のファビウス中佐は，その後メデューサMedusa艦長として来日，ペルス・ライケン大尉の中佐進級を伝え，新団長の伝習状況を視察している。

安政４年に幕府注文のコルベット，ヤパンJapan（咸臨丸）に乗って来日した第２次教官団は，総勢37人。新団長ファン・カッテンディーケ中尉の月手当は前団長と同じ，新副長のファン・トローウェン大尉の手当額は団長より３割低い。ただし新団長は中尉任官後の海上歴が５年に過ぎず，前職の国王副官は文官職。在日中は「オランダ海軍事務ミニストル（使節）」と称している。機関術教官のハルデス中尉は，長崎製鉄所建設のためファビウス中佐が推薦した牧師で，手当は団長より３割高かった。

安政６年，伝習は突然中止となる。「オランダは訓練を援助して日本に攘夷戦争をそそのかしている，との列強国非難があるので，派遣教官を有志者の雇用へ切り替えたい」と商館長から要望されたが，幕府が経費負担増に応じなかったのが真相である。解職慰労金（団長は５年分，水夫は２年分の手当額）は，第１次派遣団と同様に支給された。団長は帰国２年後に海相に就任。前任の団長２人はともに中将へ昇進してから下院議員（ファビウス）と海相（ライケン）へ選出されている。

日米通商条約の軍事協定によりアメリカで建造されたコルベット富士山が，慶応２年（1866年）に横浜へ到着，新たに軍事協力を約束したフランスのバリー中尉以下４人を迎えて実習が始まった。しかし，海軍国イギリスの横槍でわずか３カ月で交代。トレイシー少佐以下13人の教官団が江戸に着任した。幕府・各藩から選抜された生徒54人，士官学生30人の教育を暮れから始めるが，年明けの鳥羽伏見の戦いから官軍が江戸へ迫り，２月には伝習中止となった。トレイシー団長（月手当375両）以下全員が，契約保証期間２年分の支給を条件に帰国する。

明治新政府は，蘭英両海軍の方式を比較検討してイギリスからダグラス少佐以下34人を招いたが，海軍兵学寮で前回と同様に選抜された生徒へ同種の教育を再開するまで５年の歳月が流れてしまった。

団長からの「士官候補認定」が得られない生徒を，政府が少尉補へ任官させたことに失望感をつのらせたダグラス団長は任期途中で帰国する。もっとも「少佐在任３年になるため，本来の職務に戻りたい」と，海軍省へ陳情しているので，「大佐昇進に必要な海上歴不足で出世が遅れる」のが最大の理由だったのであろう。トレイシー少佐が在任７年で大佐へ進級しているのに比べ，ダグラス少佐は１年余計の８年を要している。なお両少佐は，ともに大将まで昇り，最高位を極める逸材だった。

第１表　階級別の年俸額（単位：フルデン）

大佐［カピタン］	11,000
中佐［カピアン・ロイテナント］	8,000
大尉（艦長）	5,000
大尉（副長）	3,800
中尉	2,400
一等機関士	2,500
二〜三等機関士（平均）	1,600

第２表　幹部教官の手当額（単位：フルデン）

教官団長	大尉	ペルス・ライケン	450
副長	中尉	ス・ハラウェン（造船砲術）	250
士官	中尉	エーグ（運用・測量）	225
同上	二等主計	デ・ヨンフェ（数学・蘭語）	225
准士官	三等機関士	ドールニクス	125
同上	同上	エフェラルス	125

ライケン（左）とカッテンディーケ。いずれも海軍伝習のため徳川幕府が雇用したオランダ海軍の軍人である。

Q１　本国へ帰国後海軍大臣となったお雇い外国人は？

1 ファビウス　2 ハルデス　3 カッテンディーケ　4 トレイシー

海軍 100　P6　作業者 DTP PS　uetake
海軍 100　P7　作業者 DTP PS　uetake